

西穂独標への追悼登山

田中 勝人

追悼登山に参加したのは、今回が初めてであった。西穂独標まで行って11人の御霊に哀悼の意を表したいと思いつつ、40年以上の歳月が流れてしまった。

高2の夏の学年登山に私も申し込んだ。1, 2, 4, 6, 7組は前班、3, 5, 8, 9組は後班に分けられ、私は後班となり難を逃れた。落雷による死などを誰が予想したであろうか。しかも、生死を分けた理由があまりにも偶然すぎた。亡くなった11人は、不運としか言いようがなかった。また、現場に居合わせて、重傷を負った学友や卒業が遅れた学友など、死と隣り合わせになった学友のことを想うと、私のような立場の人間があれこれと書き綴ることにためらいを感じる。

初めて参加した追悼登山は、あいにくの天候であった。独標周辺の道は、降りしきる雨のせいもあり、歳を重ねた私には陰しい道に感じられた。独標では、自然に涙が出てきた。青春のまっただ中で亡くなった彼らの無念さを想うと、慰めるべき言葉が見つからなかった。また来るよ、と語るのがせいぜいであった。彼らは、この道をものともせず、西穂の頂上を極め、しっかりと大地を踏みしめて折り返していたことであろう。その場に佇んで、私は彼らの冥福を祈るばかりであった。

今回は自然の厳しさを実感した追悼登山であったが、今度は、自然の別の顔を期待したい。そして、彼らには、もう少し語りかけることができればと思っている。

田中哲三

今年は、卒業40周年の呼びかけで多くの21回生が山に登った。まだ現役の人、リタイアした人、様々の立場で様々な人がいた。でもみんな、みんなのことを忘れずに42年後のここに登ってきた。御霊は間違いなく慰撫されたと思う。合掌。

